近畿学校保健学会通信

No. 88

平成９年８月31日発行
近畿学校保健学会事務所
〒673-14 兵庫県加東郡社町下久米942-1
兵庫教育大学疫学健康教育学研究室内
TEL&FAX（0795）44－2180，2178
振替口座　01140－8－89516

目　　次

第44回近畿学校保健学会を終えて …… 1

第44回近畿学校保健学会報告 …… 3

1．総会記録 …… 4

2．一般講演についての座長コメント …… 7

3．特別講演 …… 14

4．教育講演 …… 15

5．学会印象記 …… 15

近畿学校保健学会名誉会員・評議員名簿 …… 19

近畿学校保健学会会則 …… 21

近畿学校保健学会役員選出規程 …… 22

平成９年秋の関連全国学会・大会案内 …… 23

第44回近畿学校保健学会を終えて

第44回近畿学校保健学会長
学会長　山　本　公　弘

第44回近畿学校保健学会開催にあたりましては、不慣れな者が学会長を引き受けしましたにもかかわりませず、学会の幹事、評議員、会員の方々の並々ならぬご協力とご指導を賜りました。

さらに、会員の方々からの準備期間におけるご厚情、当日の温かいご支援、年賀状によるお励ましなど、開催に関連して得られた喜びは数えきれません。

この誌面を借りまして、運営委員ともども心よりお礼申し上げます。

さて、今後の参考のために出席者の分析を、とのご意見がありましたので、当日受付で簡単な調査を行い次の結果を得ました。

出席者総数は251人で、その内訳は、評議員91人、一般会員51人（前日までの入会者を含む）、当日の新規入会者28人、当日参加者（学生を含む）81人でした。

当日参加者の内訳を地域別にみますと、奈良県38人、滋賀県３人、京都府４人、大阪府20人、兵庫県９人、和歌山県１人、石川県２人、福井県１人、香川県１人、神奈川県１人、不明１人でした。

当日参加者の内訳を職種別にみますと、養護教諭39人、保健主事２人、栄養士８人、医師３人、歯科医師１人、薬剤師10人、大学職員６人、病院職員３人、学生８人、不明１人でした。

以上のように、出席者の職種や地域はかなり広く分布していました。

本学会では、研究者と実践者が互いに影響しあい調和することを願い、研究発表と実践発表の２分野に分けて、一般演題を募集しましたところ、両分野から計40題の応募をいただきました。

ありがとうございました。

第44回近畿学校保健学会報告

本年度の学会は平成9年6月7日（土）に山本公弘教授（奈良女子大学保健管理センター）を会長として，奈良女子大学を会場にして開催された．年次学会は例年梅雨の時期に開催されているが，本年度学会当日は，さわやかに晴れた初夏の一日となった．

午前中の一般演題発表はA, B, Cの３会場で行われ，メンタルヘルス，健康診断，保健指導，生活環境（A会場），基礎的研究，健康教育（B会場），意識・安全，総合的分野，実践発表（C会場）などについての40演題が報告された．実践発表は今年度特に，山本学会長の発案で設けられたものである．各会場では入りきれないほど学会員と当日参加者（学生を含む）が参集され，活発な議論が交わされた．

午後は会場を由緒ある記念館２階講堂に移し，学会長講演と教育講演が行われた．山本公弘教授による学会長講演は「臨床医学からみた現代食生活指導の落とし穴ー医学情報をどう伝えるかー」のテーマで行われ，研究成果を実践に取り入れる場合には広く総合的に判断することが必要であること，そして保健指導には独自の視点が必要であることを食生活指導の具体例をあげてわかりやすくお話いただいた．教育講演では(1)適応障害とその予防，(2)肥満指導のポイント，(3)コンピュータ学習による目の疲れの予防，(4)歯肉の保健指導，(5)アルコールの麻酔作用ー危険なイッキ飲みー，(6)O-157大腸菌感染の予防　の６つのトピックなテーマについて，それぞれご専門の先生から要点を押さえて解説していただいた．午後のスケジュールは盛りたくさんで，ほとんど休憩時間もなく約３時間続けられたが，広い講堂の満席の参加者の関心は高く，良い意味での緊張感と熱気が感じられた．

総会記録，一般講演についての座長のまとめ，特別講演および教育講演のまとめ，学会印象記はそれぞれご担当の先生に執筆いただき，本通信に掲載したので御一読ください．

当日は奈良女子大学の教育遺産が公開され，学会終了後の懇親会ではなごやかな交流が行われた．本年度学会の企画運営にご尽力いただきました山本公弘学会長はじめ北村陽英事務局長，運営委員の先生方に心より御礼申し上げます．

（幹事長　勝野眞吾）

1．総会記録

1) 学会長挨拶

第44回年次学会長の山本公弘教授が挨拶された．

2) 議長選出

慣例により前年度会長一色玄教授が議長に選出された．

3) 議事

(1) 会務報告

①会員数 398 名（名誉会員18 名を除く）

②会議開催，学会通信など

平成8年4月 6 日　第2回幹事会（大阪市立大学医学部付属病院F18会議室）

6月 26 日　兵庫教育大学に学会事務所移転

9月 2 日　学会通信No.85 発行

10月 1 日　第 1 回幹事会開催（大阪教育大学天王寺キャンパス）

平成9年2月 1 日　学会通信No.86発行

4月 12 日　第 2 回幹事会開催（奈良女子大学）

(2) 平成8年度決算報告

勝野幹事長より報告され，中神，藤田監事の会計監査による報告を受けて承認された．（別表 2）

(3) 平成9年度予算案

勝野幹事長より説明があり，原案どおり承認された．（別表 3）

(4) 次期（第45回）学会開催地および会長

滋賀県で大矢紀昭教授（滋賀医科大学看護学科地域生活看護学講座)を学会長として開催することが承認され，大矢紀昭次期学会長が挨拶された．

別表 1

近畿学校保健学会会員数

平成9年3月31日現在

	名誉会員	評議員	一般会員	計
滋賀	2	23 (5)	20 (7)	45 (12)
京都	3	32 (3)	29 (13)	64 (16)
大阪	5	75 (16)	49 (9)	129 (25)
兵庫	1	45 (12)	40 (20)	86 (32)
奈良	3	29 (3)	13 (3)	45 (6)
和歌山	4	30 (7)	7 (1)	41 (8)
その他	0	0	6 (2)	6 (2)
計	18	234 (46)	164 (55)	416 (101)

( )内は平成8年度会費未納者

別表２ 近畿学校保健学会　平成8年度決算報告　（平成９年３月 31 日）

収入の部

	予算額	決算額	増減	摘　　要
会費収入	960,000	999,000	39,000	3,000×333 件
繰越金	556,396	556,396	0	
雑収入	5,000	3,960	△1,040	利息，寄付金2,000
合計	1,521,396	1,559,356	37,960	

支出の部

	予算額	決算額	増減	摘　　要
印刷費	450,000	545,262	△95,262	
郵送費	250,000	255,065	△ 5,065	
事務費	30,000	32,932	△ 2,932	
人件費	100,000	158,750	△58,750	
会議費	30,000	35,529	△ 5,529	
交通費	20,000	5,800	14,200	
学会補助費	200,000	200,000	0	奈良へ支出
予備費	441,396	48,000	393,396	大阪へ新入会員24名分
（小計）		(1,281,338)	(240,058)	
次年度へ繰越		278,018		
	1,521,396	1,559,356		

上記報告の通り相違ありません

平成９年４月 28　日

中神　勝

藤田　大輔

別表３ 近畿学校保健学会平成9年度予算案（平成 9 年　4 月 12）

収入の部

	予　算　額	摘　　要
会費収入	1,110,000	370 名
繰越金	278,018	
雑収入	5,000	
合計	1,393,018	

支出の部

	予　算　額	摘　　要
印刷費	500,000	通信No.87,88,89　封筒印刷等
郵送費	250,000	
事務費	30,000	
人件費	100,000	
会議費	30,000	
交通費	20,000	
学会補助費	200,000	
役員選挙費	100,000	
予備費	163,018	
合計	1,393,018	

名誉会員

氏　名	所　属	自　宅　住　所
安藤　格	大阪	〒664　伊丹市南野中曽根141
伊東祐一	大阪	〒573　枚方市南中振1-18-7
今井英夫	大阪	〒639-22　奈良県御所市柳町746
岩田正俊	奈良	〒692　安来市荒島町2309
小沢忠治	和歌山	〒640　和歌山市園部1611-7
川畑愛義	京都	〒605　京都市東山区今熊野日吉町48
黒田健雄	和歌山	〒640　和歌山市田中町2-13
小出陽造	和歌山	〒640　和歌山市手平4-4-15
佐守信男	兵庫	〒662　西宮市甲陽園西山町8-37
高島雅行	京都	〒602　京都市上京区中町通丸太町上ル俵屋町452
藤井義顕	滋賀	〒524　滋賀県守山市笠原町415
山本勝朗	大阪	〒590　堺市霞ヶ丘町3-4-1
笠松勇次	和歌山	〒649-12　日高郡日高町大字萩原562
北村李軒	京都	〒606　京都市左京区下鴨北野々神町18-1
橘　重美	奈良	〒632　天理市指柳町堀毛339
中牟田正幸	奈良	〒633-02　宇陀郡榛原町天満台西4-21-9
植村良雄	滋賀	〒520　大津市松本2-9-34
米田幸雄	京都	〒569　高槻市天王町14-19

2．一般講演についての座長コメント

A会場

演題番号（A01～04）　　北　村　陽　英（奈良教育大学）

A01～04：梅雨入り直前の晴れた土曜日に第44回近畿学校保健学会は開催された。A会場で朝一番（AM９：30スタート）のセクションであったが、早くから出席者が多く、会場の後方で立って聞かれる方々に申し訳なく思いつつも、改めてメンタルヘルスへの関心が強いという印象を受けた。

柿内順子氏は小・中学生の保健室登校の増加傾向と校内援助組織の必要性を中心に、美馬信氏他は女子短期大学生の性格特性と、抑うつ性と易疲労性との相関関係を、西牧真里氏他は高校生のセルフエスティームについて学業、身体面、出席日数等との関係の調査結果を、元田綾子氏他は高校生不登校に取り組んだ過程で初任養護教諭が経験した諸々の困難と今後の抱負、課題について発表された。

どの発表も日ごろ養護教諭が思い感じていることと共通する所があるらしく、質疑応答は白熱した。限られた時間を10分ほどオーバーしてしまったため、あえて質疑を打ち切らせていただいた。質疑応答からも養護教諭は日常業務でメンタルヘルスに深くかかわっていることが感じられた。

演題番号（A05～07）　　堀　内　康　生（大阪教育大学）

A05：健康診断に関する演題はインスリン依存型糖尿病（IDDM）の発見に関する学校検尿の役割が報告された。発症は秋－冬に多いことから年２回の検尿が有効なこと、学校関係者はIDDM学童がインスリン注射の中止できない負担を背負っていることを理解し発症者のＱＯＬを確保するために医療機関との連携を密にする必要性を強調した。

A06：肥満予防を中心としたパイロットスタディである。第１次から精密検査を経て事後処置の必要な児童生徒が過半数を占めたと報告された。食生活の偏りと運動不足の問題は学校給食を通じた活動、余暇の利用方法など具体的な処方箋が必要である。生活環境の整備は各個人に差し迫った問題として問われていることでもある。

A07：歯科検診の器具等に関するアンケート調査であった。小学校にくらべ高等学校において、小規模校にくらべ大規模校において器具の消毒や洗口場と蛇口数などに改善の余地を残しているとのご指摘であった。会場は立ち見席も余地がなくなるほどの盛況さで活発な議論が熱心に行われた。会員相互の情報交換と協力関係の促進されることを期待している。

演題番号（A08～11）　　新　平　鎮　博（大阪市立大学）

A08：心疾患を持つ児童生徒の体育指導を決定する現状について調査結果が報告され、生徒が意欲的に行うために、ぜひ、個人にあった評価をすべきで、相互の情報交換が必要という指摘と、運動量を評価した指導を考えたいという提言がされた。管理区分表のある心臓疾患であるが、実際は医師の連絡が不十分であると感じた貴重な調査研究であった。

A09、10：気管支喘息、アトピー性皮膚炎に対する保健指導について、養護教諭を対象にしたアンケート調査結果の報告であった。情報が不十分で各種のネットワーク作りが重要であるという指摘がされた。フロアーから学校保健委員会を活用してはどうか、という意見もあった。規模はどうあれ、各種の専門家が体育教諭、養護教諭に協力する形で何とか子供たちの保健指導に役立たせるための工夫が必要であろう。

A11：アレルギー疾患の子供の保健指導について、「情報源が不足している」「知識を獲得していく機会が少ないこと」などが指摘された。いずれも学校現場で子供と接する職種（教諭、養護教諭）が熱心に考えているが情報不足などもあり、主治医や学校医がもう少し協力できないかという感じを得た。ぜひ、上記の発表が関連諸機関で検討されることを期待したい。

アレルギー協力医の問い合わせは　0726－20－7474（日本アレルギー協会関西支部）

演題番号（A12、13）　　寺　田　光　世（京都教育大学）

A12：阪神大震災による影響　－児童の心身に大して－

阪神大震災の発生から2年を経過した時点で、子どもたちの保健室利用状況、行動の変化、身長体重への影響を養護教諭の面接によって調査した。その結果として、児童には家族関係、友人関係、勉強などの悩みが多く、物を大切にする心が薄れ、身体発育面で体重の年間発育量が震災後大きく増加し、全国平均を上回ったことが報告された。

A13：発育から知る'95兵庫県南部地震が小学生の心身に与えた影響

'95兵庫県南部地震の影響として、育ち盛りの小学生に現れた発育の歪みをを検出するため、今月の値から前月の値を差し引いた差（差分）をグラフに表す方法を用いた。その結果、差分のグラフによって地震の影響を読みとることができたとして、子どもの発育を1カ月間隔で測定し続けることの重要性を指摘した。

B会場

演題番号（B01～04）　　大　山　良　徳（大阪工業大学）

B01：「運動生理学のためのＳＯＤ活性の新測定法」藪下典子（大阪教育大学）ほか３名

これまでのＳＯＤ活性の測定は、ヘモグロビン１㎎当りとして表現されてきたが、本研究の測定法は、赤血球中の活性酸素が水分中にあることを考慮し、水分１㎎当りのＳＯＤで表現するものである。よってこの新しい測定法の開発に、本研究の特徴があり、今後の運動による貧血などの究明にも大いに期待されるであろう。

B02：「姿勢に関する研究」河瀬雅夫（天理大学）ほか１名

本研究は、姿勢と歯科咬合および足蹠刺激との関係を明らかにする目的、歯科咬合、モアレ写真および足底圧力の結果から考察を試みたものである。例数が少ないので、今後の研究結果に一層期待されるが、咬合異常者は何らかの他の障害をもち、とりわけ腰痛や膝関節痛をもつ者が多かったことは、注目に値する。このことに関し演者らは、筋肉の過負荷によるものとその原因を推定している。

B03：「保健室来室記録ソフト開発記事に対する関心の地域分布について」横尾能範（神戸大学）

本研究は、Windows 対応のソフト開発とこれに興味を示す全国レベルの人々に呼びかけて、よりよいソフトの開発をめざしたものである。このソフトへの関心度は、全国的にみて近畿圏が最も高く、それぞれに地域差がみられたという。しかし、前回調査した結果と今回とのそれを近畿圏内で比較すると、前回調査で最も高い関心を示した大阪府が、最も低かったことである。このことは、前回の普及率がのちの関心度に大きく影響することを示唆している点で興味深い。

B04：「最大酸素摂取量の１週間の逐日的変化」下村尚美（神戸女子大学）ほか１名

クラブ活動を楽しく行いながら機能効果をねらう目的で、１週間のエアロビクス運動が、VO_2 max にいかなる影響を及ぼすかについて検討した研究である。ＲＰＥからＨＲレベルの評価をもとに運動強度を観察し、190 拍前後に達したときの VO_2 を VO_2 max の近似値として評価している。このことの妥当性と、１週間以上の継続的観察が今後に残された。なお分析に当り、増加率や変動率を求める方法も考えられよう。

演題番号（B05～07）　　八　木　　保（京都大学）

大学入学時とその６ヶ月後の皮下脂肪厚測定により体脂肪率の変化を求め、一方その間の身体活動状況をアンケート調査し両者の関連をみている。

B05：では入学時正常の女子大学生について、運動をよくした群は脂肪率減少ＬＢＭ増大、非運

動群は脂肪率増大ＬＢＭ減少などの変化の傾向が示され、Ｂ06：では正常男子学生について運動群で脂肪率減少ＬＢＭ増大の傾向、しかしＬＢＭ減少の例もあるが、食事の規則的なものの方がＬＢＭ減少率は小さかったとの結果を示している。

Ｂ07：は肥満学生の運動活動と体脂肪率変化の関係をみているが、運動をよくした群は体脂肪率減少ＬＢＭ増大の傾向を示している。

身体活動による体重・体脂肪管理の資料が提示されていた。

これらの図から記号で表わされた複数の要素の関係を読み取りにくいと言う難点がある。

演題番号（Ｂ08～11）　　川　畑　徹　朗（神戸大学）

Ｂ08：「エイズ教育情報ネットワークのプロセス評価－ＩＤ配布および利用状況」勝野眞吾（兵庫教育大学）

ＩＤ分布が都道府県により大きく異なる理由の一つとして、エイズ教育担当者の意識の問題が取り上げられた。意識を高めるための方法の一つは、演者も指摘するように提供する情報の内容を利用者のニーズにあったものにしていくことであろうと感じた。

Ｂ09：「青少年の危険行動のモニタリングに関する基礎的研究(1)　米国ＣＤＣの Youth Risk Behavior Surveillance」永井純子（兵庫教育大学）他

我が国においても日本学校保健会によって児童・生徒の健康状態サーベイランス調査が実施されており、こうした既存の調査を演者が紹介しているような内容と方法に修正していくことが、より現実的な方法であるように思う。

Ｂ10：「米国の学校における薬物教育プログラム(1)　幼稚園児から小学３年生」野口康枝（兵庫教育大学）他

この年齢での薬物教育の内容は、セルフエスティームの確立や対人関係能力の形成に置かれている。こうした能力の形成は薬物乱用以外の様々な問題行動の予防にも有効であり、我が国においてもその導入が期待される。

Ｂ11：「小学校における薬物乱用防止教育の試み」武内克朗（兵庫教育大学）他

本研究は、ロールプレイを取り入れた我が国では比較的新しいタイプの授業である。ロールプレイに至るまでのスキル指導の充実、ロールプレイに参加した子どもに対するフィードバックの方法について、さらに実践的研究を積み重ねることを期待したい。

演題番号（B12～14）　　勝　野　眞　吾（兵庫教育大学）

B12：「児童・生徒のライフスタイルとライフスキルとの関連性についての研究」

橋本利恵子（神戸大学教育学研究科）他

B12およびB13は9都道府県の小学校10校、中学校6校の1,486名の児童・生徒を対象としたライフスタイルとライフスキルの関連性についての研究である。B12の報告では健康行動として喫煙と運動習慣を取り上げ、これらの健康行動とSelf-esteem、ストレスマネジメントの関連が検討された。その結果、喫煙経験がない、週3日以上の運動習慣を持つ、などのリスクの低い健康行動をとっている児童・生徒はSelf-esteemが高く、ストレスに対してより、積極的な対処を行うことが明らかにされた。

B13：「小・中学生の食生活上の健康行動とライフスキルの関係について」

重川　綾（神戸大学教育学研究科）他

B13の報告では食生活上の健康行動とライフスキルの関連が検討された。食生活上の健康行動の指標として日常の食べるおやつの種類と食生活に対する自己評価が取り上げられ、乳製品やくだものをおやつとしてよく食べている児童・生徒、また健康的な食生活をしていると自己評価している児童・生徒はSelf-esteemが高く、ストレスに対しても積極的に対処する傾向があることが示された。

両報告はわが国の学齢期の小児のライフスタイルとライフスキルの関連性について興味ある知見を提供するものである。今後、年齢、性別および地域別の分析や家庭環境の影響についての検討が望まれる。また、ライフスキル、Self-esteem、ストレスマネジメントなどの用語について共通認識をした上での議論の発展が必要と思われる。

B14：「小学生のライフスタイルへの教育的介入のための基礎調査 －食習慣について－」

西口敏世（和歌山県立医科大学看護短期大学）他

健康なライフスタイルの形成を目的とした教育的介入のための基礎的研究である。B14では和歌山県南部4町の小学校4年生児童とその保護者347組を対象とした食習慣についての調査結果が報告された。今回の報告では特に学校給食がある小学校と学校給食のない小学校の比較検討が行われ、学校給食が実施されていない地域では乳類、野菜類、卵類、豆類の摂取量が少ない一方、菓子類の摂取量が過多である傾向が顕著である実態が明らかにされた。この結果は小学生の食生活における給食の持つ意味を示すとともに、地域の実態に即した食生活指導の重要性を示すものである。なお、発表では食品群別の摂取目標量（所要量）が示されなかったが、他の研究と比較するためにも充足率の基準となる数値は示されるべきである。

学校を基盤とした健康教育、あるいはライフスタイル教育においては、何よりも対象となる児童・生徒の実態を把握することが必要である。B12～B14の3題の研究は断面調査法ではあるが、よく準備された研究計画にもとづいたものであり、今後の発展が期待される。

C会場

演題番号（C01～04）　　林　　正（滋賀大学）

C01：女子大学及び専門学校1年計149名を対象に、「やせ願望」についての調査を行った。あわせて生理学、栄養学的な知識との関連を検討したものである。質問紙は主として「やせる」ことに対する関心、理由、「やせる」ために今までに実施したこと、「やせ」についての情報源及び減量の知識等であった。回答の結果として、きれいになりたいからが86.6%と最も高率であり、将来の健康のためには14.1%であった。今までに「やせる」ために実施したことのあるものは「軽い食事制限」が最も多かった。知識と行動は直結しないこと、宣伝文句に惑わされない教育の必要性が指摘された。

大学生、専門学校生の調査であるが、高校生の知識の相違や、やせ願望をどのように考えているのか、また対象者の生活習慣や態度に問題のある人とこの願望と関連があるのか等の質問があった。理想体格との関連とあわせての検討が望まれる。

C02：女子大及び短大生のやせ願望の状況と、その心理的傾向との関連性が報告された。有効回答は346件であった。健康自己評価による体型、食習慣から健康である者75.6%、健康状態に満足している者53.5%、現在太り気味である者72.8%、やせたい者84.4%であった。やせ願望が強いことは01の報告と共通している。やせ願望と心理的不安傾向との間に関連性が認められた。今後適正体重に関する保健指導を行っていく上で、心理的特性を考慮した指導の必要性が指摘された。一種の流行でありメディアのようなものを考えておられるのか、との質問があった。ＢＭＩの指導を行って意外な顔をされることもあり、体脂肪計を用いての指導がいいのではないかとの意見があった。

C03：女子高校生の摂食障害への手がかりを求めての意識調査の結果である。アンケート調査の対象は2年134名、3年135名である。食行動ではもっと体重を減らしたい者が78.4%みられた。食事内容の偏りが26.0%あった。自己を否定的にみる者が70%前後あり、大人になりたくないが40%、生理なんかなくなればいいが74%等が1年により多くみられた。不安抑うつ傾向から体がだるい、自分の評価に対する不安、他者から干渉の拒否を選択する者は多かった。15%以上のやせは全体で7.7%で、15%以上のやせを示しながらやせ願望を抱いていない者が4.8%いたとの報告であった。アンケートの回答は記名が自由であるので、身長、体重の測定値がアンケートと一致していない。肥満との関係では一致させる必要がある。

C04：学校管理下の小学校における事故災害の発生状況（平成3～7年度の日本体育学校健康センターの申請件数を集約した）を、年度、月、負傷、場所、曜日別等の内訳が示された。従来この種の報告は数多くなされている。これらの調査結果から自校の事故災害の予防に結びつく資料としては活用できない事が多い。めんどうであっても、保健室に来る子どもの負傷の全てについて「ど

のようにして負傷したか」を、担任と協力してくわしく聞いて記録することである。とりわけ①子ども自身の不注意によるものか、②第3者によるものか、③或いは環境の不備が原因なのかを明確に聞き出すことである。これらの資料の数年のつみ重ね（3年なり、6年間の卒業まで）によって、はじめて予防に結びつく資料となる。

演題番号（C05～07）　　宮　下　和　久（和歌山県立医科大学）

C05：学校保健活動の起点と医学的対応の起点の違いについて、「医療の起点」、「当人の起点」、「自律の起点」の3つの観点から論じている。本報を基調とした更なる展開を次報に期待したい。

C06：パソコン使用によって作成された「歯の検査結果個人カード」を活用した実践活動研究である。本報は子どもたちに自分の歯の健康状態を認識させ、歯の健康行動を惹起させる方法の1つとして、大いに参考になると思われる。

C07：身体的、精神的に不安定な生徒に対しては継続的な観察が必要であり、担任と養護教諭が協力して支援することが重要であることを実証している。健康観察とそれに基づく保健指導のあり方を示す研究である。

演題番号　（C08～C13）　　守　田　幸　美（奈良教育委員会指導主事）

C08：生徒保健委員会の実践より（西村啓子）では、中学生の悩みやストレス等について、生徒保健委員会活動の中で、実態調査、スライド作成、演劇など「生徒参加型」の指導方法で心の健康教育の在り方の実践を発表された。今後は、個々へのアプローチと自己解決能力を高める指導が必要である。

C09：自己の体を見つめ、生きる力を育てるために（村井洋子他）では、平成元年から8年間の学校管理下の負傷（健康センター報告分）について、分析を行い、児童・職員の安全意識を高めた。けがの手当、体への関心の指導では、手作り教材（骨格模型・内蔵パネル）が効果的であったと報告された。

C10：性教育副読本発刊と性教育に取り組んで（小松充代）では、小・中学校一貫した性教育の推進を図るため、五條市養護部会が、市教育委員会に働きかけ、副読本発刊に至った経緯と、地域の幼・小・中の系統的、計画的な性教育のを実践の成果を紹介された。

C11：体重測定を利用した保健指導（長田育子）では、毎月体重測定後の15分間を保健指導の時間に位置付け、年間計画による実施の中で、磁気黒板の利用、抜歯した歯の酸性腐食の実験、プールの水質検査の実験等は子どもに健康にとって健康に関して意欲、関心をもたせるに効果があった

とのこと。

C12：病原性大腸菌O157からの教訓（岩本スミ子）では、集団発生の体験から、本感染症の発病者と過敏症状（アレルギー等）の関連性は、55.5%の高率の結果を示し、食中毒発生防止、心のケアー等心身ともにたくましい子どもの育成には、行政、地域、学校が一層緊密な連機が必要との教訓を得た。

C13：エイズ教育の取組（平尾美季）では、性教育を基盤としたエイズ教育を、教科、特活に位置付けるための、校内体制の働きかけの中で、時間確保、学習内容精選の難しさを発表された。今後の性教育は情報化（テレクラ・援助交際）等に対応できるセルフエスティームを育てる教育、ライフスキルなどが必要と考える。

3．特別講演　座長コメント

山本公弘（奈良女子大学保健センター）
「臨床医学からみた現代食生活指導の落し穴　－医学情報をどう伝えるか」

座長　大　手　信　重（奈良県医師会学校医部会副会長）

今日のわが国において、こどもの栄養、食生活が大きな問題となってきた。即ち、こどもの生活習慣、食生活が不規則かつ多様化し、運動不足、遊びの場と時間の不足等と相俟て飽食と弧食、さらに食物摂取の内容、量、質そのものが健康に好ましくない方向へと変容した。そこで、「こどものうちから健康づくり」「こどものうち健康に好ましい生活習慣づくり」の大切さが認識され、特に食生活を中心として適切な対応が必要となってきた。

本日の特別講演では、こどもの食生活について保健教育、保健指導をするにあたって、指導者が注意しなくてはならない基本的な問題を具体例を示しながら解り易く述べられた。即ち、わが国ではこどもの食生活についてすでに多くの研究がなされ、多くの評価すべき成績が報告されている。現在、これらの成績に基づいて、こどもの食生活について保健教育、保健指導が進められているが、その際に、指導者はそれぞれの研究成果の意味するものをよく理解し、熟知しておく必要があり、それらの実際の指導にあたっては、研究の成果とその内容を総合的に判断し、調和のとれたものになるように注意しなくてはならない。また、その際、集団または、個としてのそれぞれの視点にたった指導を進めるべきであり、ことにこどもの食生活の指導にあたっては、それぞれの発達段階に応じて、適切に指導することを忘れてはならないということであった。

こどもの食生活の教育指導を進めるにあたって、指導者にとって考えるべき示唆に富んだ内容であった。

4．教育講演　座長コメント

「現代における子どもの健康問題」

座長　北　村　陽　英（奈良教育大学）

教育講演は、午後の少し暑くなったころに重要文化財である記念館の2階講堂で満員の出席者を得て、日ごろ学校保健と深くかかわっておられる6名の医師の方々によっておこなわれた。

飯田順三氏（奈良県立医科大学精神医学助教授）は、不登校事例の中には狭義の精神科治療の必要な例も多く（48.2%）、児童生徒個人、家庭と学校状況から不登校の病理と予後を紹介され、保健室登校の重要性を強調された。奥田忠美氏（国立奈良病院小児科医長）は、国立療養所西奈良病院での肥満児童の指導経験から、小児肥満の増加、肥満がもたらす諸々の悪影響、身体所見、治療（食事療法、運動療法、行動療法）とくに食事療法について的確に話された。西信元嗣氏（県立奈良医科大学眼科学教授）は、コンピュータ学習による眼精疲労は、眼の異常、肉体的異常、心的異常、環境問題がコンピュータ作業による眼の疲れとして出現することがあり、眼は敏感な心身異常の警報装置であると話された。岸文隆氏（奈良県歯科医師会理事・学校歯科部）は、学校検診においてこれまではムシ歯に重点が置かれてきたが、これからは歯周病（歯槽膿漏、歯周疾患）も重視されるべきであることを強調された。田村雅有氏（奈良教育大学保健管理センター教授）は、若者のイッキ飲みが死に至る危険性をもっていること、酒（エタノール）の体内での吸収分解のメカニズムと東洋人のその特徴、そして酒を楽しむ方法を話された。柳生善彦氏（奈良県内吉野保健所長）は、過去の学校給食による腸管出血性大腸菌O-157による食中毒の集団発生例の経験から、二次感染（家庭内感染）の起こり方、集団感染発生時の対応、学校保健における予防対策について述べられた。

いづれの講演も現在の学校教育現場と深くかかわった内容であった。講演後の残り少ない質疑応答時間には実質的な質問が非常に多くだされ、講師の各先生方から丁寧なご返事をいただいた。質問はまだ多くあったが予定時間をはるかにオーバーしたため教育講演を終わらせていただくこととした。

5．学会印象記（1）

堀　内　康　生（大阪教育大学）

今年度の学会は奈良女子大で開催された。奈良という地名を聞くと直感的に“大和はくにのまほ

ろば…”と心に浮かび、故郷を思う響きがあります。

会場は重要文化財に指定されている記念館をメインに行われた。学会長の山本先生が強調されたように「研究発表」と「実践発表」の調和を意図したプログラムである。教育講演では学校保健の重要な課題が論じられた。各演者とも深い経験をお持ちの先生方が実践可能な視点から話を進めていた。適応障害では心の悩みを受け止めるための基礎知識について、肥満指導は肥満症に進行させない具体内方法と肥満症の子どもの保健指導について、コンピュータ学習では電磁波の危険の真贋の程度と眼の疲労を防ぐ実践的方法について、歯肉炎の注目されだした理由と予防の方法について、アルコールに関してはその功罪を含めてパッチテストによる耐性を調べて対処する心構えについて、0-157 大腸菌感染の診断と扱いの実際および予防の方法についてそれぞれやさしく解説された。盛り沢山な話題について休憩時間なしに進行したが参加した会員の先生方は最後まで熱心に会場を離れなかったことが強い印象として残っている。これらの健康問題は学校に在学する子ども達に起こっているのであり、解決の迫られている問題である。しかし、従来の方法では解決できないことが課題である。学会に参加した各職種の関係者が相互の間で連携が可能な方策について真剣に模索することが求められている。実践的な解決方法を考えるための話題を提供する役割は大きかったと考えている。一般演題は 3 会場に分かれていたためＡ会場だけの参加となった。この会場は保健指導に密接な演題が多いこともあって満員の盛況であった。メンタルヘルスは自分と他者との係わりや自己評価の問題など対応の困難な事態が日常的に起こることの危機感と解決方法について真摯な議論があった。健康診断は学校検尿、肥満、歯科検診について問題点が提起され取り組みについて議論された。保健指導は心疾患の子どもの体育指導の実践についての調査である。アレルギーに関しては養護教諭が保健指導に係わる機会が増加していること、しかし新しい情報が得られず対応に苦慮していることが報告された。生活環境は阪神大震災による心身への影響が報告された。Ａ会場の報告を通じて子ども達の健康問題は多岐に渡り、対応もまた専門的な実践能力の必要な状態となっていることが改めて確認された。ここに提起された問題解決のために新しい知識や情報の入手、学校内の保健組織の充実、保護者、学校医、主治医など相互の協力関係を強化することが必要である。保健室の役割は大変重要であり、そのために機能を充実させることが子どもの健康に大きな影響を持つことが強く印象づけられた。今学会のテーマである研究と実践の調和がより深く理解され子ども達の笑顔が学校中にあふれることを願って努力を続けることが会員の課題であると考えている。

懇親会では新緑の校庭を訪問した鹿に驚きながら地ビールの新鮮な味を堪能させていただきました。近畿学校保健学会が実践に役立つ会としてできるだけ多くの分野の新入会員を迎えて発展することを願っています。

学会印象記（2）－いま、いちばん知りたかったこと－

勝　井　きみ子（湊川女子短期大学）

養護教諭の職務に携わって半世紀になる。

9年前、停年退職と同時に養護教諭養成教育機関に移ってからも学校保健学会のほかにカウンセリング学会、性教育学会、その他各種研修会等には時間の許す限り真面目に、根気よく全国を駆け巡ってきた方ではないかと自負している。が、こゝにきてつい忙しさにかまけてほかに気持が削れていることも否めない。だが今期はなんとしてでもと意を決したことが思いがけなくもこのたびのお土産を頂戴する破目になってしまった。

養護教諭の発表を中心にというご指定もあり、できるだけ「研究」と「実践」の2分野にチェックを入れ、あわたゞしく移動を試みたがその目的を達することは困難であった。

学会長がご挨拶の中で記された“窓から大佛殿の屋根や春日原生林を望み、居ながらにしてロマンチックな雰囲気に包み込まれる”余裕とてなく、また、これが「研究発表」、これが「実践発表」という、私にとってはうんと目新しい、例えば、昨今保健主事に任命された養護教諭が昭和47年12月以降いまも変っていない4項目のその職務の上に保健主事に課せられた任務として求められているものは“いじめの生徒に対する厳しい対応とその対策、そして学校保健からのアプローチと解決策の提言”というこの保健主事の役割をになっている養護教諭がこれにふさわしい資質、能力をどのように発揮しているのか、平成7年3月までは保健主事にはなり得なかった養護教諭がそれでも担任を動かし、ときには教科担当をも動かし、回を重ねて家庭訪問に同行し、相談活動においてははかり知れない時間を子どもと向き合いながら教師間で激論を戦わせていたあの頃。いまはどのように変ってきたのか。祈る気持で傾聴したが残念ながら今後に期待を托したい。

学会印象記（3）

北　山　敏　和（和歌山県教育庁）

最近あまり使われなくなった言葉に「衛生」という言葉がある。生命あるいは生活を衛（まも）るということだから、この言葉は本来ずいぶん意味が深い。「衛生」よりもさらに古い言葉に「養生」という言葉がある。これは命を養う、つまり時間をかけて生命の持つ力を引き出すという意味だから、まさに病気を予防し、けがや病気を治癒させるための基本的姿勢を示している。しかし、現在では医療や保健の場でこれらの言葉が積極的に使われることは少ない。

一方、セルフエスティーム、セルフエフィカシー、ライフスキル、ヘルスプロモーション、ストレスマネージメントなどのカタカナ語は大もてで、今回の学会でも数多く使われていた。

これらの言葉はそれらを母国語とする国々の保健医療を理解する上で重要な言葉である。しかし、それらを即わが国での保健教育や保健指導に借用し、日本語に訳することも出来ぬまま、それらを道具に、きわめて複雑な背景を持つはずの問題を一刀両断に切ることの危険性はないのだろうか。

健康に関わる問題があるのは、セルフエスティームが低く、ライフスキルに欠け、ストレスマネージメントが下手で、これらは社会制度としてのヘルスプロモーションのシステムに問題がある結果だ・・・という筋立ては理解できる。とするなら、たとえば現在日本が世界でもトップクラスの長寿国であり、薬物乱用者や青少年の重大犯罪が少ないのは、他の国と比較してセルフエスティームが高く、充分なライフスキルを備え、ストレスマネージメントがうまく、社会全体としてヘルスプロモーションのシステムがうまく機能していたからと理解していいのか。では、それなのになぜ今それらの低さや、欠けていることが問題となるのか・・・などを十分に検討した発表が見られなかったのはなぜか。

簡素でありながら気高く、かつ採光や通風に配慮の行きとどいた、奈良女子大の古い記念館を見て、新しいことが必ずしも価値あるものではないことを感じさせられたが、とりわけ実践と密接に結びついた本学会では、言葉においてもそのことを考えてみる必要性があることを強く実感させられた。

平成８・９年度近畿学校保健学会評議員

（平成９年５月12日現在）

（順不同　▲印は幹事、○印は新評議員）

◇滋賀県

石榑　清司（滋賀大学　教育学部）
伊藤　昭三（市立大津公民館晴嵐分館）
大音　晋一（滋賀県薬剤師会）
蒲生　芳子（長浜市教育委員会　生涯学習課）
小林　清基（東診療所（滋賀県医師会））
○清水富佐子（県立守山北高校）
中村　清美（大津市立長等小学校）
▲林　　正（滋賀大学　教育学部学校保健）
藤居　正博（県歯科医師会）
村山　綾子（県立東大津高校）
山口　金治（滋賀県学校薬剤師部会）
山元　善弘（滋賀県歯科医師会）
▲板持　紘子（滋賀大学　教育学部附属中学校）
▲上島　弘嗣（滋賀医科大学　福祉保健学）
水野由美子（甲賀町立佐山小学校）
川副　　茂（滋賀県学校薬剤師部会）
木戸　増子（滋賀県立武道館）
草野　薫子（大津市教育委員会学校保健課）
谷川　尚己（滋賀県立体育館）
▲南條　　徹（滋賀県医師会　学校医部）
播磨谷澄子（大津市立打出中学校）
萬木由利子（養護教諭部会）
山岸　司久（元滋賀大学　保健管理センター）
山野　恒一（滋賀医科大学　小児科）

◇京都府

岡本　忠行（京都府教育庁指導部保健体育課）
金山　政喜（京都府医師会学校医会）
○神谷　幸男（京都府歯科医師会）
栗山千代美（京都市立正親小学校）
○請田　安夫（京都市学校医会）
小島　廣政（京都産業大学）
白木　文代（京都府教育庁指導部保健体育課）
○沢山美佐緒（京都教育大学附属高校）
庄司　博延（元　京都女子大学）
忠井　俊明（京都教育大学　保健管理センター）
津田　謹輔（京都大学　総合人間学部）
○出口　康雄（京都府歯科医師会）
友久　久雄（京都教育大学）
森下　玲児（京都大学　保健管理センター）
○山岸似佐美（京都市教育委員会）
横田　耕三（京都府医師会）
大山　　肇（京都外国語大学）
▲金井　秀子（京都文教短期大学）
木村　静雄（立命館大学名誉教授）
○楠　　裕子（京都教育大学附属桃山中学）
小西　博喜（川崎医療福祉大学）
○小林　豊生（京都府立医大精神神経科）
白滝　忠光（京都府学校薬剤師会）
杉浦　守邦（蘇生会病院　健康増進センター）
▲瀬戸　　進（大谷大学　文学部保健体育科）
▲妻形八重子（京都市村松児童館）
▲寺田　光世（京都教育大学）
西　祥太郎（京都府医師会　学校医部会）
平野登志子（華頂短期大学）
松浦　賢長（京都教育大学）
▲八本　　保（京都大学　総合人間学部）
吉岡　文雄（神戸女子短期大学　保健体育科）

◇大阪府

浅野　宣春（浅野医院）
阿部　昌宏（大阪摂南大学）
安藤　　純（大阪府医師会　学校医部会）
井上　幸子（大阪府立刃根山養護学校）
○岩本スミ子（堺市立百舌鳥小学校）
▲上延富久治（大阪教育大学）
江原　悦子（（大阪教育大学附属池田小学校）
岡崎　延之（大阪女子短期大学）
小野　忠義（元　大阪女子短期大学）
加納　　薫（大阪府医師会　学校医部会）
川辺　克信（大阪市天宗保育専門学校）
菊池恵美子（北天満小学校）
○肥塚　正宏（大阪府医師会　学校医部会）
後藤　　章（大阪教育大学）
○後和　美朝（大阪国際女子大学　人間科学部）
島津　健三（大阪府医師会　学校医部会）
神木　照雄（堺市中保健所）
杉山美代子（東大阪短期大学）
▲須藤　勝見（大阪教育大学）
高折　和男（大阪教育大学）
田中　桂子（淀川女子高等学校）
玉城　晴孝（大阪府医師会　学校医部会）
出口　和邦（大阪府高等学校歯科医会）
中内　正己（大阪市立高等学校）
中川　八重（大阪市立阿部野中学校）
西村　民生（修成建設専門学校）
花原　節子（大阪基督教短期大学）
藤岡　千秋（大阪教育大学）
藤森　　弘（大阪大学医学部　非常勤講師）
▲堀内　康生（大阪教育大学）
▲松岡　　弘（大阪教育大学）
光藤　雅康（大阪教育大学）
三好　暢子（大阪市立住吉第一中学校）
森　喜代子（大阪市立開平小学校）
東　　真美（大阪教育大学）
天冨美彌子（大阪教育大学）
▲一色　　玄（大阪市立大学医学部　小児学教室）
入江　悦子（大阪市立八幡屋小学校）
上野　康夫（大阪工業大学）
鵜飼　大策（大阪府歯科医師連盟）
▲大山　良徳（大阪工業大学）
小河　弘之（大阪教育大学）
角道　静枝（大阪市教育委員会）
○萱村　俊哉（武庫川女子大学　文学部）
▲上林　久雄（大阪成蹊女子短期大学）
楠本久美子（大阪教育大学附属高校天王寺校舎）
小山　健藏（大阪教育大学）
▲後藤　英二（大阪女子短期大学）
坂本　吉正（元大阪市立大学生活科学部）
▲白石　龍生（大阪教育大学）
更家　　充（堺市金岡保健所）
進　龍太郎（奈良　飛鳥病院）
陶山　勝彦（大阪府医師会　学校医部会）
○竹中　恒夫（大阪府医師会　学校医部会）
玉井　太郎（大阪府医師会）
辻　　立世（大阪府立鳥飼高校）
仲井　正名（大阪女子短期大学）
中神　　勝（大阪府立大学　総合科学部）
難波　英子（関西女子短期大学）
○野々上泰信（大阪府学校医会）
福本　絹子（大阪成蹊女子短期大学）
○藤本　正三（大阪府医師会　学校医部会）
古田　肇子（大阪女子短期大学）
本庄　康一（大阪市靭テニスセンター）
松嶋　紀子（大阪教育大学）
美馬　　信（大阪女子短期大学）
○元村　直靖（大阪教育大学）
森内　　徹（大阪市学校歯科医会）

門奈　丈之（大阪市立大学医学部　公衆衛生学）
山本　信弘（大阪教育大学）
吉田　熙延（心斎橋健康クラブ飯島クリニック）
○若林　　明（大阪府医師会　学校医部会）
柳井　　勉（大阪教育大学）
山本　暎子（関西女子短期大学）
○吉岡　隆之（神戸市看護大学）

◇兵庫県

青山　泰子（神戸市教育委員会）
荒木　　勉（兵庫教育大学　生活健康系）
和泉　正人（学校医）
出井　梨枝（神戸市立須磨高校）
内山　三郎（神戸大学医学研究国際交流センター）
大橋　郁代（兵庫県教育委員会　体育保健課）
荻原　一輝（一輝会　荻原整形外科病院）
家治川　豊（甲南女子大学）
北口　和美（西宮市教育委員会　学校保健課）
近藤　文子（兵庫女子短期大学　家政学部）
高橋　洋子（兵庫県立八鹿高校）
立石　光代（兵庫県立夢野台高校）
○東郷　正美（神戸大学発達科学部）
中井　久純（神戸国際大学）
○西尾　久英（神戸大学医学部　公衆衛生学）
長谷川ちゆ子（西脇市立重春小学校）
藤田　大輔（神戸大学　発達科学部）
▲美崎　教正（元神戸大学　発達科学部）
▲南　　哲（神戸大学　発達科学部）
村井　俊郎（兵庫県学校歯科医会）
山城　正之（元神戸大学　発達科学部）
▲横尾　能範（神戸大学　国際文化学部）
○山根　洋司（明石市立野々池中学校）
明瀬　好子（神戸市立鷹匠中学校）
五十嵐裕子（神戸大学　発達科学部附属明石中学校）
今出　悦子（西宮市立西宮高校）
大江米次郎（大阪樟蔭女子短期大学）
岡本　靖子（兵庫県立長田高校）
奥田　幸子（神戸市立兵庫商業高等学校）
▲勝野　真吾（兵庫教育大学　生活健康系）
▲川畑　徹朗（神戸大学　発達科学部）
北村　庄衛（兵庫県学校薬剤師会）
小泉　直子（兵庫医科大学　公衆衛生学教室）
桜井　久恵（兵庫県伊丹北高校）
▲住野　公昭（神戸大学医学部　公衆衛生学教室）
田中　洋一（神戸大学　発達科学部）
長野　　大（神戸国際大学）
橋野　静子（神戸市立楠高等学校）
濱中　良郎（兵庫教育大学　保健管理センター）
○藤井美恵子（神戸大学　発達科学部附属明石小学校）
平瀬　悦子（武庫川高校）
三野　　耕（兵庫教育大学　生活健康系）
百元　三記（加古川市立平岡南中学校）
山名　康雄（兵庫教育大学　生活健康系）
渡辺　正樹（兵庫教育大学　疫学健康教育学）

◇奈良県

有山　雄基（奈良県医師会）
加納　庸元（奈良市歯科医師会）
○川井健二郎（奈良市歯科医師会）
▲北村　陽英（奈良教育大学　学校保健）
○児玉なつ子（香芝市立旭が丘小学校）
○土田　容子（奈良県葛城保健所）
中谷　　昭（奈良教育大学）
浜口　達子（奈良市学校薬剤師部会）
藤田　康子（奈良県立明日香養護学校）
○圓山　一俊（国立療養所松籟荘）
森井　博之（天理大学　教養部保健体育科）
矢奥まり子（奈良県立桜井高校）
柳生　善彦（奈良県内吉野保健所）
山下　節義（奈良県立医科大学　衛生学教室）
○吉岡　　章（奈良県立医科大学）
大手　信重（奈良県医師会）
▲河瀬　雅夫（天理大学　体育学部）
北村　翰男（奈良市学校薬剤師会）
北山勘解由（奈良市医師会）
竹田　斌郎（奈良市医師会・学校医部会）
▲田村　雅宥（奈良教育大学　保健管理センター）
出口　庄佑（聖母被昇天学院女子短期大学）
西信　元嗣（奈良医科大学　眼科学教室）
○平井　宏明（奈良県立医科大学）
○福島美登里（奈良市立二名小学校）
守田　幸美（奈良県教育委員会）
八木　　哲（奈良県学校医部会）
安田　忠男（奈良県薬剤師会）
▲山本　公弘（奈良女子大学　保健管理センター）

◇和歌山県

▲猪尾　和弘（和歌山大学　保健管理センター）
井原　義行（和歌山県高野口保健所）
加藤　　弘（和歌山大学　教育学部保健体育科）
川口　吉雄（和歌山県学校歯科医会）
北山　敏和（田辺市立田辺第三小学校）
黒田　基嗣（和歌山県立医科大学　衛生学教室）
左海　伸夫（スミヤ・スポーツ科学センター）
▲武田真太郎（和歌山県立医科大学　看護短大部）
辻本　信輝（和歌山県学校歯科医会）
中　　俊博（和歌山大学　教育学部保健体育科）
中村　淳一（和歌山県医師会）
松浦　　清（和歌山県薬剤師会）
松本　健治（鳥取大学　教育学部）
▲宮下　和久（和歌山県立医科大学　衛生学教室）
▲山中　　守（和歌山県学校医会）
稲田　武彦（和歌山市医師会）
岩本　謙三（和歌山県学校薬剤師会）
柏井　洋臣（和歌山県医師会）
金尾　　宏（和歌山県学校薬剤師会）
木下　　裕（和歌山県医師会）
坂口　弘一（和歌山市学校医会）
島　　新一（和歌山県学校医会）
冷水　和雄（和歌山県医師会）
田中　章二（和歌山県立星林高校）
虎谷　良雄（和歌山県医師会）
中村　靖男（和歌山県医師会）
橋本　　勉（和歌山県立医科大学　公衆衛生学教室）
▲松岡　勇二（和歌山大学　教育学部保健体育科）
宮西　照夫（和歌山大学　保健管理センター）
○森岡　郁晴（和歌山県立医大　衛生学教室）

近畿学校保健学会会則

第1章　総　　則

第1条　本会は近畿学校保健学会と称する。

第2条　本会は学校保健に関する研究を行い、学校教育に寄与することを目的とする。

第3条　本会の事務所は幹事長のもとにおく。

第2章　事　　業

第4条　本会は第2条の目的を達成するために次の事業を行う。

1．総会、年次学会の開催
2．会誌その他出版物の刊行
3．学校保健に関する調査研究
4．その他本会の目的達成に必要な事業

第3章　会　　員

第5条　会員は本会の目的に賛同し、会費を納入したものとする。

第6条　会員は年次学会、会誌などを通じて研究を発表することができる。また会誌の配布および本会の事業について連絡を受ける。

第7条　本会には賛助会員および名誉会員をおくことができる。

第8条　賛助会員は本会の目的を達成するために賛助の意を表し、評議員会の承認を経たもので賛助会費を納めたものとする。

第9条　名誉会員は学校保健に関し、学識、経験に富み、本会に功労のあったもので、評議員会の推薦にもとづき、総会で承認されたものとする。

第10条　会員は会費を滞納し、若しくは本会の名誉をけがす行為があったときには評議員会の議決により除名することができる。

第4章　役　　員

第11条　本会に次の役員をおく。

1．評議員　若干名
2．幹　事　若干名（うち1名を幹事長、一部を常任幹事とする）
3．監　事　2名

第12条　役員の任期は2年とし、再任を妨げない。役員は会員より選出されるものとする。

第13条　役員の選出方法は別に定める。

第14条　役員の任務を次のように定める。

1．評議員は評議員会を組織する。
2．幹事は幹事会を組織する。常任幹事は会務を処理する。幹事長は学会を代表し、会務を統括する。
3．監事は会計を監査する。

第5章　会　　議

第15条　本会の会議は総会、評議員会および幹事会とする。

第16条　総会は幹事長が毎年1回召集し開催する。必要に応じ臨時総会を開催することができる。

第17条　評議員会は幹事長が召集し、本会の運営に関する重要な事項を審議決定し、総会の承認をうるものとする。

第18条　幹事会は幹事長が召集し、評議員会に提案する議題の審議ならびに総会、評議員会から委任された会務を処理する。

第19条　評議員会および幹事会は構成員の過半数をもって成立する。

第6章　年次学会

第20条　本会は毎年1回年次学会を開催する。

第21条　年次学会は会員のうちから評議員会で選出し、総会で承認され、年次学会の運営にあたる。

2．年次学会長は幹事会に出席することができる。

第7章　会　　計

第22条　本会の経費は、会費、寄附金その他の収入をもってあてる。

第23条　本会の会計年度は毎年4月1日より翌年3月31日までとする。

第24条　本会の収支決算は、監事の監査を受け、評議員会の議を経て総会の承認を得るものとする。

雑　　則

第25条　本会則の変更は総会の決議によるものとする。

附　　則

第26条　会費は年額3,000円とする。

第27条　本会則は、昭和28年6月29日より施行する。

昭和33年6月13日　一部改正
昭和39年5月17日　一部改正
昭和49年9月6日　一部改正
昭和56年7月9日　改正
昭和57年6月8日　改正

近畿学校保健学会役員選出規程

（趣旨）

第１条　この規程は、近畿学校保健学会会則第13条の規程に基づき、近畿学校保健学会役員選出に関する事項を定める。

（評議員の選出）

第２条　評議員の選出は、学会活動等を考慮の上、各府県別に当該地区幹事が推薦し、幹事会の承認を得なければならない。

（幹事の選出）

第３条　幹事の選出等については、次の方法による。

(1)　各府県ごとに、会員の選挙によって当該地区の評議員から選出する。

(2)　選挙権及び被選挙権の有資格者は、前年度までの会費を納入した者とする。

(3)　各地区別幹事の定数は、当該地区被選挙権者の10分の１（端数切り上げ）に１人を加えた数とする。

（選挙管理委員会）

第４条　幹事の選出に当たっては、選挙管理委員会（以下「委員会」という）を置く。

２　委員会は、選挙前の適当な時期に各府県ごとの幹事の互選によって選出された各１人（計６人）で、構成する。

３　委員長は、委員会において選出する。

４　委員会は、４人以上の出席がなければ議事を開き、議決することができない。

５　委員会に関する庶務は、学会事務所において処理する。

（投票）

第５条　選挙は、各地区別定数の連記による無記名投票とし、投票は、郵送で行う。

２　同数得票の場合は、委員会において抽選によって決定する。

３　当選人が辞退した時は、次点の者から順次繰り上げるものとする。

（幹事長及び常任幹事）

第６条　幹事長及び常任幹事は、幹事の互選により選出し、評議員会の議を経て、総会において承認を得なければならない。

（監事）

第７条　監事は、幹事長が推薦し、幹事会において承認するものとする。

附　則

１．本学会役員に任期中の地区異動があった場合には、当該役員は、任期満了まで、暫定的に選出地区にかかわりない役員としてとどまる。

ただし、その地区異動が、選出された年度の次の年次学会時までであった場合には、当該役員の転出した地区は、補充の役員を選出することができる。この場合、補充役員の任期は、転出役員の残りの任期とする。なお、補充役員の選出方法については、当該地区役員に一任する。

２．本学会役員の任期中の事故等に関しては、前項を準用する。

３．この規程は、平成３年６月15日から施行する。

平成９年度秋の関連全国学会・大会案内

学会名	開催期日	会　場	事務局・連絡先
第44回日本学校保健学会	10月４日（土） ～5日（日）	愛媛大学教育学部 （愛媛県松山市文京町３）	〒790　愛媛県松山市文京町３ 愛媛大学教育学部内 第44回日本学校保健学会 事務局（担当　山本万喜雄） Tel 089-927-9472,9381 Fax089-927-9396
第56回日本公衆衛生学会総会	10月16日（木） ～18日（土）	パシフィコ横浜 （横浜市西区みなとみらい1-1-1）	〒231　横浜市中区日本大通1 神奈川県衛生部健康普及課内 第56回日本公衆衛生学会 総会事務局 Tel/Fax 045-212-5270
第44回日本小児保健学会	11月13日（木） ～15日（土）	国立京都国際会館 （京都市左京区宝池）	〒602　京都市上京区河原町通 広小路上ル梶井町465 京都府立医科大学小児科学 教室内　第44回小児保健学 会事務局 Tel 075-251-5571
第８回Auxology研究会	11月29日（土）	第一信金ホール （東京都中央区日本橋3-4-13）	東京都中央区日本橋大伝馬町 5-7　住友銀行人形町ビル ノボノルディックファーマ （株）（石原） Tel 03-3249-8554